



灯山



幟山



岩山

蒭田山笠

福岡県指定無形民俗文化財

3度姿を変える

ひやま
灯山

9月末土曜日
翌日曜日・火曜日

のぼりやま
幟山

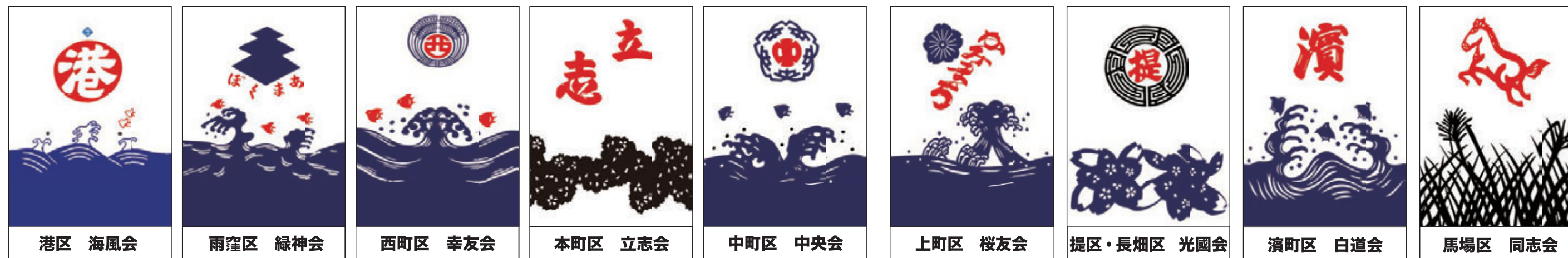
大祭（岩山）
前日

蒭田山笠保存振興会

いわやま
岩山

10月第1日曜日
宇原神社神幸祭大祭

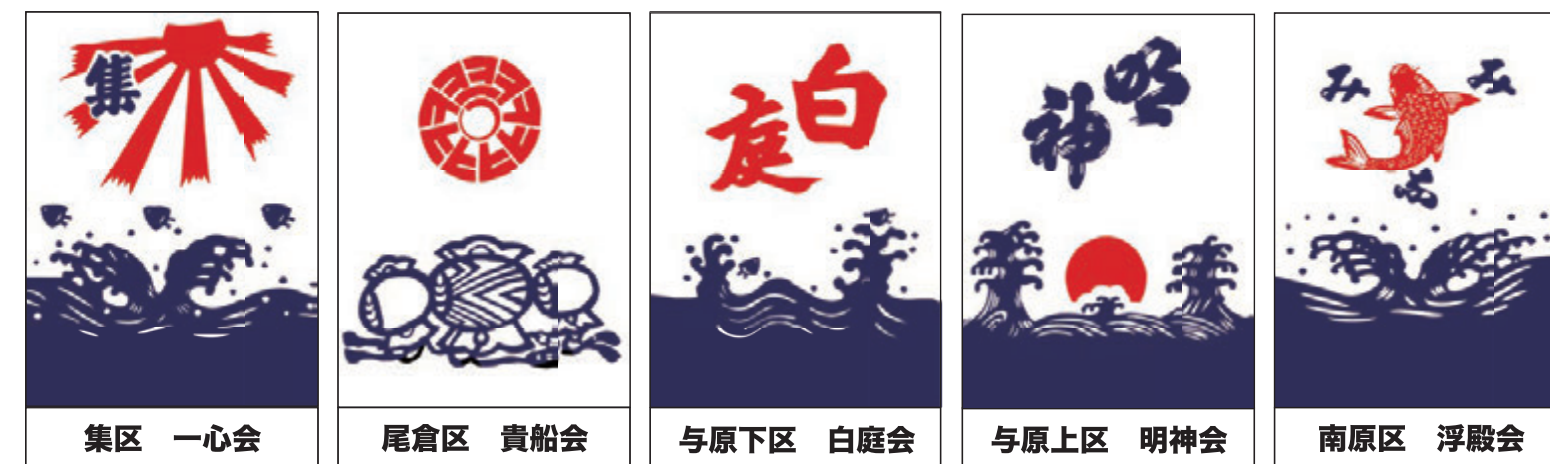
公式サイト kandayamakasa.jp
問合せ先 kanda@kandayamakasa.jp



北郷



南郷



苅田山笠とは

苅田の神幸祭は「宇原神社縁起」によれば1442年（嘉吉2年）に初めて神幸が行われたとされる。縁起には「慶長2年8月15日に行幸式を改め放生会と号す。これまでは笠鉾ばかりであったが、氏子村々より鉾山が出るようになった。前日14日に幟斗り立て、太鼓・鐘にて湯中に昇き汐かきが行われた」とある。1597年(慶長2年)からは放生会として「鉾山九挺」が神輿に供奉しているが、さらに1719年（享保4年）には「8月15日祇園会」とあり「鉾山高さ一丈斗り、横五尺四方、高欄あり、鰯大幕水引を張、立物、幟山、作り花、人形、造物、立鐘、太鼓にて山昇く事村々人別出て昇き、御旅所へ出る」とある。

山笠になったのは16世紀末。大正時代に、かき山から現在の山車に変わった。素朴ながら山笠の原型を伝える数少ない様式とされ、昭和48年（1973年）、県の無形文化財に指定された。祭りは9月18日の鉦卸しに始まって15日間続く。（現在最終日は10月第1日曜日　始まりの鉦卸しはそれより逆算して14日前の日曜日）

現在の祭りは10月第一日曜日の神幸祭から行事を逆算して、鉦卸し、連歌奉納、2日の提灯山笠、幟山笠、当场渡しへと続く。出駕する山笠は提灯山→幟山→飾り山へと同じ山がそれぞれ飾り付けによって姿を変える。苅田山笠は台車に岩山を作り、社と人形や造花が置かれ、その上に「ボテ花」と呼ぶ竹が依代として3本立てられるのが特徴である。神幸祭の中心行事は宇原神社から神輿が神事場である旧宮所の浮殿の地（現在の役広場）への行幸で、神輿の供をして14区の氏子が思い思いの意匠をこらした飾り山を引いて神事場に勢揃いする。神輿が帰途へ就いた後、氏子が山笠と山笠を激しくぶつけ合う喧嘩山笠となる。

灯山（ひやま）

苅田山笠は三つの顔をもつ。まず、夜の顔。9月27日と29日の夜（現在はその年に協議の上灯山の日程を決める）、山車は約220個のちょうちんに飾られた「灯山」として姿を見せる。鉦と太鼓にはやされて、ゆらめく明かりが町をめぐる。

幟山（のぼりやま）

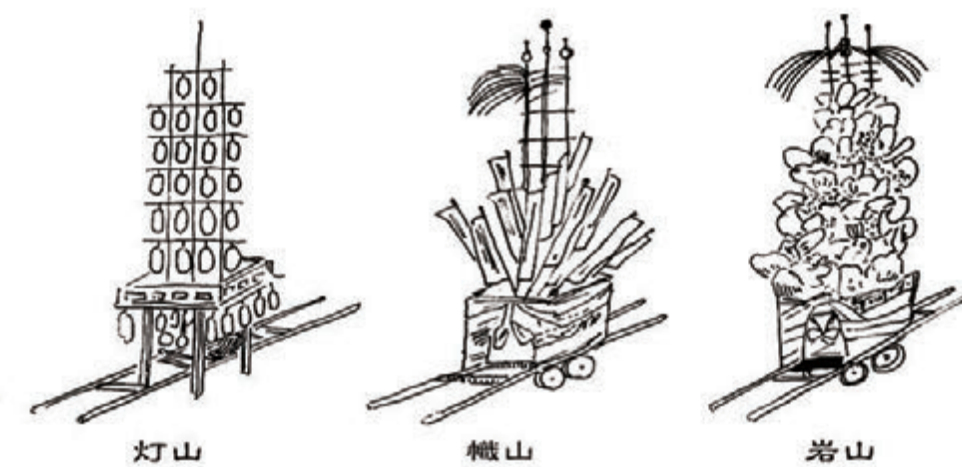
代わって10月1日は（現在10月の第1土曜日）は昼間の顔である。山車は色とりどりの幟を立てた「のぼり山」に一変する。簡素で、それでいて華やかで、古い時代の祭りをしのばせる。

岩山（いわやま）

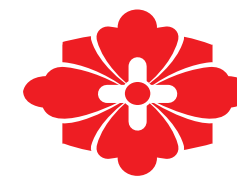
開けて2日（現在10月第1日曜日）。山車は再び変身する。巨大な岩を背にした人形が、ぼて花に包まれて台座に座る。「岩山笠」と呼ばれる飾り山は、各地に伝わる山笠の原型をとどめた形式とされている。

突き当て

昼すぎ、町役場前の広場に14基の山笠が勢ぞろいする。午後三時。鉦、太鼓が鳴り響く広場を、山車が車輪をきませて走り始める。千人近い男達が入り乱れてかけ回り、ぶつかり合う。海のあれくれの息づかいが、地響きとともに伝わる。



大正に神職が描いた苅田山笠の図



宇原神社例大祭

鉦卸し

神幸祭2週間前の日曜日



連歌奉納祭

鉦卸しの4日後



御神輿潮汲み

神幸祭の8日前



例祭

神幸祭前日午前

山笠汐汲み

神幸祭前日夕方



神幸祭

10月第1日曜日